

# 植民地朝鮮に渡ったコロニアル・ミッシヨナリー

——日本人女教員を中心に——

朴 宣 美

【要約】 本稿は、植民地朝鮮に渡ったコロニアル・ミッシヨナリーとしての日本人女教員について、日本女性の朝鮮認識・帝國意識や、帝國の担い手論の観点から分析するものである。第一章では、一九〇〇年代初期から日韓併合直後までの時期に、どのような日本女性たちが朝鮮に渡り、何を見て、どのように認識したかを分析する。第二章では、日本人女教員が朝鮮にどれほどいたかを、日韓併合以前と以後にわけて明らかにする。第三章では、日本の朝鮮支配によつて遅れた朝鮮・野蛮な朝鮮人を誰が教え導くかという帝國の困難な課題が台頭する中、日本人女教員はどのような存在として考えられ朝鮮に送られたか、そして彼女らの意識と役割はどうだったかを分析する。

史林 九七卷一号 二〇一四年一月

## はじめに

日本帝國主義は西洋帝國主義と同様、遅れた朝鮮の文明化という支配の正当化の論理に立って、文明の「福音」を伝播するコロニアル・ミッシヨナリー（植民地伝道者）を朝鮮に送った。帝國の形成とともに、自らの信念で帝國を支えようとする人びとが登場し、植民地の人びとに向かつて帝國の様々な価値を伝えようとした。

ここでいうコロニアル・ミッシヨナリーとは、日本Ⅱ先進・文明、朝鮮Ⅱ後進・野蛮という観点から、日本人として朝

鮮で教育・医療・社会福祉等の活動を行い、朝鮮の文明化に努めることで支配秩序の安定と浸透に貢献しようとした人た  
ちを指す。朝鮮人の指導・教化を自己の使命とした彼らは、キリスト教宣教師を前面に押し立てた西洋列強に対し、その  
ような宣教師不在の日本において、帝国の価値を植民地の人びとに伝道する役割を担った。彼らの意識と行動は、日本帝  
国の存立と繁栄を支えた人的基盤の構築を明らかにするために解明しなければならない重要な課題であるが、その研究は  
朝鮮近代史や日本近代史の両研究分野において立ち遅れていると言わざるをえない。

本稿では、日本帝国のコロナル・ミッシヨナリーに関する筆者の先行研究<sup>①</sup>の展開として、朝鮮に渡った日本人女教員  
を取り上げる。すなわち先行研究では、朝鮮の女子日本留学生を支援する教育事業を行った柳原吉兵衛という人物を、帝  
国の中で新たに登場したコロナル・ミッシヨナリーの一例として分析したが、本稿では、朝鮮人の教育のために朝鮮に  
「移動」した日本人女教員という教育者集団をコロナル・ミッシヨナリーの視点から分析する。

もとより、日本人女教員を欧米のキリスト教海外伝道組織が異教徒地に送った宣教師と同質の集団として見なすことは  
できない。彼女らは、日本の師範教育制度によって養成され、朝鮮へ渡った人たちである。初等教員の場合は、朝鮮で実  
施された師範教育制度によって輩出された者も多い。国家によって養成され、派遣・配置された教員は、宗教的使命感に  
基づく自発的な本来のミッシヨナリーとは異なる。しかし、本論で詳しく述べるように、日清・日露戦争を経て日韓併合  
へと、日本の朝鮮支配が確実に拡大していく中で、日本の知識人による朝鮮論が盛んになり、そこで、朝鮮に渡る日本人  
教員は、かつて日本に渡って教育事業等を行った西洋宣教師のような存在として見なされた。西洋列強の仲間入りを果た  
し、受容した西洋文明を他のアジア地域や諸民族に普及する立場に転じた日本社会において、日本人教員は、コロナ  
ル・ミッシヨナリーとして認識され朝鮮へ送られたと言えよう。

従来、朝鮮における日本人教員について、朝鮮総督府の教育政策の観点から、主に師範学校制度や初等教員の実態が明  
らかにされた。そこで日本人教員が朝鮮で果たした役割に関して概ね異論はない。彼らは、朝鮮支配の第一線に立つて朝鮮

人の同化・皇民化の先棒を担いだ、植民地支配の担い手として位置づけられている。彼らは、朝鮮総督府が実施した学校教育の基本理念通りに、日本という国家に忠良な臣民を作り出そうとした。特に、日本人女教員の場合は、母・妻・主婦になる朝鮮の女子生徒の婦徳の涵養に努め、朝鮮家庭の改良・日本化を行い、支配の安定化を図った。

しかし、日本人教員を朝鮮に送り出す帝国の内部において(帝国の担い手を培う土壌である日本社会の世論において)、彼らの存在がいかに認識されたかは、あまり明らかにされてこなかった。また、日本人教員の意識に関しても、総じて「日韓併合になんら疑問を抱くことなく、朝鮮人に同化教育を施すことはむしろ彼らに対する恩恵である」という植民地教育観を持ち、植民地政策の中で与えられた役割を忠実に遂行したとされたが、その遂行者としての意識の中身については分析が不十分だった。とりわけ、日本人女教員の意識はあまり取り上げられてこなかった。

本稿では、朝鮮に渡った日本人女教員を、国家の教育政策によって養成された帝国の担い手としてではなく、人びとの帝国意識という土壌が産み育て、植民地に供給したコロナル・ミッショナリーとして分析する。この視点からは、彼女らを送り出す日本社会の認識と彼女らの自己認識を一貫して捉えることができよう。また、国家との関係で担った公的な役割によってより、彼女たちの意識が朝鮮人にもたらしたものは何だったかを考えることができよう。

日本人女教員を送り出す日本社会の朝鮮認識に関して、本稿ではまず、女子教育などの女性関連問題の世論形成に影響を及ぼした婦人雑誌(『婦女新聞』、『女学世界』、『婦人界』、『ムラサキ』)といった明治の婦人雑誌<sup>④</sup>や、卒業生が朝鮮に渡っていた女子高等師範学校と日本女子大学の同窓会機関紙(今まで学校史研究の他にあまり史料として利用されなかった)を用いて、日本女性の朝鮮認識・帝国意識はどのようなものだったのかを分析する。

日本女性の帝国意識の問題は、日本の女性史・ジェンダー史研究において早くからその重要性が認識され、成果もある程度蓄積されてきた。朝鮮に渡った日本女性(奥村五百子、淵澤能恵、津田節子)の生涯を明らかにした任展慧の先駆的な研究<sup>⑤</sup>以来、戦前、女性運動家などとして名を挙げた日本女性たちがいかに植民地統治に加担したかの問題が取り上げられ

てきた<sup>⑥</sup>。近年、日本女性の戦争協力問題、「従軍慰安婦問題」研究の進展につけ、日本女性の植民地認識・帝国意識が問  
い直されており、帝国主義の支配の下に苦しむ植民地女性を「救済」することのできない日本女性のフェミニズムの見直  
しと呼びかけられもした<sup>⑦</sup>。本稿では、名のある日本女性個別の帝国意識や行動を例に挙げる今までの方法論から脱却し、  
日本女性の間に広がっていた帝国意識・植民地認識を明らかにする。

さらに、本稿では朝鮮へ渡る日本人女教員は日本社会においてどのように認識されたかを、『婦女新聞』<sup>⑧</sup>の社説等をも  
って明らかにする。これは誰が朝鮮人を教え導くのかに関する議論として、コロナル・ミッシヨナリー論といえよう。  
こうしたコロナル・ミッシヨナリー論は、戦前の日本においていかに生成・展開したかを解明しなければならぬが、  
本稿ではその第一歩として、女子教育の拡大や内容の充実を訴え言論活動を行った女子教育関係者などの考えを取り上げ  
る。

最後に、以上のような日本社会の土壌（女性知識人の認識や社会世論）に培養されて送り出された日本人女教員は、いか  
なる意識を持ち、朝鮮人に影響を及ぼしたのかを検討する。コロナル・ミッシヨナリーの役割を解明するには、史料  
に難点があるが（主観的認識・意識を媒介とする点や、史料が少ない点など）、事例を手がかりとして分析を行う。

第一章では、日本の膨張・帝国の展開をうけて、女性たちがいかなる朝鮮認識を持っていたのかを分析する。第二章で  
は、朝鮮にいた日本人女教員の数的実態を明らかにする。第三章では、日本社会における女教員に対する認識と、彼女た  
ちの自己認識、ならびに彼女たちの果たした役割は何だったかを分析する。

- ① 拙稿「柳原吉兵衛の研究——地域における『帝国』の新しい担い手  
の登場——」『二十世紀研究』京都大学二十世紀研究編集委員会、創  
刊号、二〇〇〇年、一三三～一三六頁。
- ② 数多い先行研究の中で、山下達也「植民地朝鮮の学校教員——初等  
教員集団と植民地支配——」（九州大学出版会、二〇一一年）は、代  
表的な研究の一つと言えよう。
- ③ 稲葉継雄「旧韓国へ朝鮮の日本人教員」（九州大学出版会、二〇〇  
一年）二〇一頁。
- ④ 女子高等師範学校（一九〇八年に東京女子高等師範学校と改称）同  
窓会櫻蔭会（一九〇三年創立）は、『櫻蔭会会報』（一九〇三～四三

年)を刊行した。日本女子大学校同窓会櫻楓会(一九〇四年設立)は、『家庭週報』(一九〇四〜五一年)を刊行した。しかし、『家庭週報』は、一九〇六年六月二五日発行の一九〇号をもって休刊し、同大学出版の『女子大学講義』付録『家庭』に合併されたが、一九一二年に再刊された。休刊中、櫻楓会により『花紅葉』や『櫻楓会通信』が刊行された。

⑤ 任展慈「朝鮮統治と日本の女たち」もろさわようこ編『ドキュメント女の百年(五)——女と権力——』(平凡社、一九七八年)八七〜一四四頁。

⑥ アン・テユン(안태운)「식민지애은 제국과의 여성——재조선 일본 여성 조다 세즈코를 통해서 본 식민지주의와 젠더——」(植民地に渡った帝國女性——在朝日本女性、津田節子を通して見た植民地主義とジェンダー——)、『韓国女性学』韓国女性学会、第二四巻四号、二〇〇八年、五〜三三頁。米田佐代子「帝國」女性のユートピア構想とアジア認識『歴史評論』第六二四号、二〇〇二年、一〜一五頁。鈴木裕子『フェミニズムと朝鮮』(明石出版、一九九四年)。石井智恵美

### 第一章 日本女性は朝鮮をいかに見たか

日本人の朝鮮認識については、明治時期を中心に明らかにされている。朝鮮の開港以後、朝鮮旅行記や調査報告書、新聞や雑誌の朝鮮事情に関する記事のなかで、朝鮮はいかに遅れ、野蠻か(例えば、禿山、頑固、無礼、怠け者、不潔等)が多く述べられた。とりわけ、日清・日露戦争をへて日韓併合へと、日本の朝鮮支配が加速する時期において、少なからぬ学者・知識人は、朝鮮人の生活風習(早婚、劣悪な住居環境、虐げられる女性の生活等)や朝鮮人の特徴(無規律、無気力、頑迷固陋、卑劣、懶惰、国家觀念の欠如等)を繰り返して否定的に語った。それらの言説によって日本社会に「遅れた朝鮮・文明化した日本」という見方が固定し、朝鮮蔑視観が広がった。併合後、朝鮮総督府による各種調査報告や官製の言論は、こ

「淵沢能恵と『内鮮融和』——日本の朝鮮統治下における女性クリスチャンの一断面——」『基督教論集』青山学院大学基督教学会、第三五号、一九九二年、六五〜八八頁など。

⑦ 宋連玉「脱帝國のフェミニズムを求めて——朝鮮女性と植民地主義——」(有志舎、二〇〇九年)。

⑧ 『婦女新聞』は、教師であった福島四郎によって、一九〇〇年に女子教育の研究を主要な目的として創刊された。女子高等師範学校の開校(一九〇〇年)、高等女学校令(一九〇九年)など、女子中等・高等教育が開始され、軌道に乗りだした頃であった。一九四二年まで刊行された週刊誌として、社説は創刊者の福島四郎が担当した。時事問題、婦人問題、婦人界や女学界の動向(日本内はもちろん、朝鮮の婦人界や女学界も幅広く報道)、家事・家政学関連の知識、文学作品など、その記事は多岐に渡った。主に中等程度の教育を受けた中産階級の女性を読者とし、女性関連問題の世論形成に影響を及ぼした。詳細は『婦女新聞』を読む会編『『婦女新聞』と女性の近代』(不二出版、一九九七年)を参照。

した日本人の朝鮮観（朝鮮人劣等論）を増幅したという。<sup>①</sup>

本章では、一九〇〇年代初期から日韓併合直後まで（遅れた朝鮮・野蛮な朝鮮人という蔑視観が日本社会に浸透し、日本の朝鮮支配は文明社会の当然の権利であると同時に、遅れた朝鮮の文明化を進める道として正当化された時期）を中心に、主に朝鮮女性や家庭生活を見た日本女性が、そこで何をどのように語ったのかを分析し、日本女性の中で芽生えた帝国意識の一端を明らかにする。

もとより、日本女性は、当時すでに日本社会に流布していた朝鮮に関する民族的な知識や人種的な偏見、いわゆるアジア人、アジア民族を蔑視する日本式オリエンタリズムに深く影響を受けていた。<sup>②</sup> また、朝鮮女性の後進性・劣等性について書き記したのは、日本女性だけではなく、朝鮮を旅行した日本の男性知識人たちにもいる。<sup>③</sup> つまり、当時、書き記された朝鮮女性と朝鮮女性の生活は、それが女性によつてであれ、男性によつてであれ、基本的には遅れた朝鮮の一断面として表されており、文明化という「福音」を朝鮮がいかに必要としているかを強調するためのものであった。

#### 第一節 誰が朝鮮を表象したか

朝鮮に渡り、見聞した朝鮮について、本国の女性たちに報告を行った日本女性は、大きくわけて、政治家・官僚・企業家等の家族として朝鮮に渡った人か、朝鮮で活動した人（学校設立者・教員・ジャーナリスト）・視察に渡った人・旅行者等である。以下、彼女らは、どのような立場で朝鮮に渡り、何を書き記したかを概略する。その朝鮮認識については、節を改めて後述する。

まず、日本公使館・統監府の官僚および職員の子、企業家の妻、または朝鮮視察に出た政治家の妻として朝鮮に渡り、滞在中または帰国後に朝鮮について書き記した女性として名が挙がっているのは、目賀田逸子（統監府財政監査長官目賀田種太郎夫人）、廣瀬咲子（企業家夫人）、安田靖子（統監府招聘技師夫人）の他、萩原夫人（韓国日本公使館萩原書記官夫人）、岡

部夫人（おそらく岡部長職子爵夫人）、伊藤富貴子（伊藤染工場主伊藤琴三夫人）<sup>⑤</sup> 等である。

そのうち、目賀田逸子は、朝鮮滞在を終え帰国したのち、一九〇六年頃から一九一一年までの間、上流階層の婦人の生活、住居環境、朝鮮の学校、朝鮮人の特徴等、多岐に及ぶ朝鮮談を各種の婦人雑誌に掲載した。<sup>⑦</sup>

廣瀬咲子は日本女子大学校卒業生であり、同窓会櫻楓会京城支部の結成（一九〇八年一〇月）前に朝鮮に渡り、『家庭週報』（一九〇八年六月三日～一九〇九年六月五日）に四回寄稿し、また、一九一〇年には『櫻楓会通信』に二回寄稿した。<sup>⑧</sup>

安田靖子（筆名秀蘭女史）<sup>⑨</sup> は、一九〇七年八月に朝鮮に渡って以来、朝鮮の風習や文化について『婦女新聞』に多く寄稿した。釜山に着いてから夫の赴任先である平安南道鎮南浦に到着するまでの道のりで見えたもの（風景、施設、生活等）や出会った人たちについて書き記した「鎮南浦まで」（一六回）<sup>⑩</sup>。鎮南浦で見た朝鮮文化や生活風習について二六回にわたって報告した「鎮南浦より」<sup>⑪</sup>。一九〇八年に京城に移ってから、「結水の南浦」（七回）<sup>⑫</sup> の他、統監府の行事や寺等を紹介した寄稿文（五回）<sup>⑬</sup> を書き記した。

彼女らは、進んだ日本から来た女性の目に映った、落后した朝鮮の風習や女性の生活環境について、同情やいたわりの気持と嘲笑という両面を持ち、啓蒙的立場から書き記した。例を挙げれば、次のようなものである。

「当国【大韓帝国】の風習には中々奇異なる事も尠からず、日本の三十四年前の事ども思ひ出さるゝなり……」<sup>⑭</sup>

「朝鮮といふ国は穢い国です。そして人民は呑気な人民です。女が洗濯なぞして居る処を見ましても実に焦れつたい様です。最も水の大層不自由な国ですから無理もありませんが、溝のやうな細い汚い川で、ちよいと濡らしてはこすりこすりして居る様は何とも云はれません。併し婦人方の交際振りから何かを見ましても決して愚といふ方の人民ではありません。寧ろ伶俐であるのですから、何でも日本の婦人が確乎と奮発をして交際の道を開き少し教育をしたならば、立派な国民になるであらうと思ひます」<sup>⑮</sup>（下線および

【一】の説明は筆者、以下同）

つづけて、朝鮮に渡って朝鮮を書き記したもう一つのグループとして、朝鮮で活動した女性や、視察・旅行で渡った女性性がいた。この女性らに關しても、誰でどのような立場・観点から朝鮮について書き記したか見てみよう。

まず、奥村五百子である。<sup>⑩</sup>愛国婦人会の創立者（一九〇一年）である奥村は、日本の朝鮮進出に大きな期待を抱き、誰より先んじて朝鮮に渡り（一八九六年）、全羅南道光州で実業学校を設立した。彼女は、「さて漸と学校が出来たので生徒の募集にかかりました。そして只で教へて遣るから時間を定めて来いと云つたのです。処が未開国の人民といふのは仕様がなないので、斯う云ふ事を云ふのです。学校へは行つて上げたいが、とても時間を定めて行く様な事は出来ぬ。……私  
は殆んど一年間草鞋を脱がずに辛抱したのです。後には先方からも尋ねて来る様になり好結果を奏しましたが、実に未開  
とも野蠻とも云ひ様がありません」と、朝鮮農村の在り方や、日本人の教えを拒んだり、規則的に学校に出席できなかつ  
たりする朝鮮人の有様を未開・野蠻だと見た。<sup>⑪</sup>

次に、女教員である。この時期の女教員については第二章で詳しく述べるが、例えば官公私立高等女学校（日本人学校  
や朝鮮人学校の両方）に二〇人足らずの日本人女教員が派遣されていた。彼女たちが朝鮮について書き記した例は少ないが、  
日本女子大学校卒業生として一九〇九年に朝鮮に渡り、淑明高等女学校の教員となつた金森京子に見られる意識、すなわ  
ち、遅れた妹たる朝鮮女性に対する先に進んだ日本女性の姉意識は、おそらく日本人女教員の大多数が持っていたであろ  
う。金森は、「朝鮮人とて、決して私共と異つて居るわけございませんが、唯、文明に後れたのであつて、其の一事を  
今にして氣附いたのであります」といひ、朝鮮婦人の家庭問題（ここでは畜妾問題を紹介した後、「然し合併になりまし  
た上は、彼等も又私共と同じ日本婦人であり、同胞姉妹であります。何卒教育あり、同情ある日本婦人はどしどし当地  
【朝鮮】に來られ、婦人を導いて戴き度いと存じます」と呼びかけた。

ジャーナリストとしては、『婦女新聞』京城支局の記者を挙げる事ができる。婦女新聞社は、一九〇九年九月三日発行の『婦女新聞』（第四八九号）に京城支局開設の社告を載せ、同号から「京城支局だより」、「京城通信」



というタイトルの記事を掲載した(一九二七年六月二九日付の第八九三号まで続く)。京城特設通信人、京城支局記者などの名で書かれており、その内容は、日人居留民社会の動態・行事、学校案内、婦人界・婦人会の紹介、朝鮮各地の地理や景観、施設や交通など多岐にわたる。<sup>20</sup>それらは、朝鮮事情の紹介を主としているが、ここにも進んだ者としての啓蒙的眼差しが貫かれている。例えば、朝鮮婦人界の未熟さ(例えば、朝鮮婦人は婦人組織の活動やその目的を十分に認識しておらず、人の交際という社交的理由で婦人組織に参加している)を慨嘆したり、<sup>21</sup>養蚕施設で働く朝鮮女性が日本式に生活している姿をみて、「あはれ澁瀬たる帝国の新婦人は、日に月に日化し来るぞ頼母しき」と称賛したりした。

朝鮮へ旅行または視察のために出かけ、旅行記を記した女性として、まず、塚本はまが挙げられる。彼女は朝鮮の学校で教えていた夫を息子とともに逢いに渡り、「櫻蔭会会報」に朝鮮での経験を詳しく語った。<sup>22</sup>朝鮮人を野蠻視する態度に満ちており、日人居留民の無茶な振舞いさえも、野蠻な朝鮮人からの悪影響と見なすほどだった。<sup>23</sup>短期間の旅行者として朝鮮人がいかに遅れ、野蠻かを書き記した他の例として、櫻楓会会員による例があるが、彼女がなぜ朝鮮を旅行したかは分からない。

次に、婦人組織からの派遣を受けて朝鮮視察を行ったのは、日本キリスト教婦人矯風会の渡邊常子と、櫻楓会の小橋三四・柴田とうである。<sup>24</sup>彼女たちは日韓併合直後に朝鮮に渡って、組織関係者と会合したり、学校や病院を見学したり、朝鮮家庭を訪問して交流を行ったりした。彼女らの朝鮮視察には、例えば訪問を受けた櫻楓会会員の次のような報告から見ると、在朝日本女性に使命感を鼓舞するという目的もあったようだ。「思へば併合此の方、私共の責任は愈々重く相成候に支部の現状を省れば誠にお恥かしく、如何にもして新領地の会員として、価値ある働きを為さんと願ひ居り候へど、熱心か又は力からの不足より、甲斐もなう過し居り候折柄、両姉の御話は誠によき刺戟にこれあり候し、鈍りし私共さへ、愉快限りなく候ひき」と。そして、朝鮮視察の成果を受け櫻楓会は、朝鮮女学生二人(淑明高等女学校)の日本留学の経費を支援するため募金活動を成功裏に行ったりした。<sup>25</sup>

以上で、一九〇〇年代初期から併合直後までを中心に、朝鮮を経験した日本女性が何をどのような視線で書き記したかを見た<sup>②</sup>。日清戦争直後に朝鮮に渡った奥村五百子の他は、日露戦争後に朝鮮に渡ったが、婦人組織から朝鮮視察を行ったのは併合直後のことだった。彼女らの多くは、高学歴者であり、多様な立場で朝鮮を経験した。彼女たちは、文明化した日本・野蛮な朝鮮、進んだ日本女性・遅れた朝鮮女性という視点から朝鮮を見た。次節で彼女らの朝鮮認識を詳しく分析する。

## 第二節 彼女らは朝鮮をどう見たか

ここでは、一九〇〇年代初期から併合直後まで朝鮮を経験し書き記した日本女性の朝鮮認識について、二つの点を取り上げる。一つは、朝鮮・朝鮮人がどのように遅れているかという点である。二つは、日本と朝鮮の関係、特に日本女性と朝鮮女性との関係をどう認識したかである。

まず、朝鮮人は、卑屈、不潔、遊惰な人で、そのような旧来からの劣等な特徴が朝鮮を落後させた、彼女らは見た。

例えば、「要するに八道の天地【朝鮮】は遊惰、不潔、虚栄、旧来の習慣のミイラにして、進取の気象等は地を拂つて見るを得べからず。果して何れの日か、此のミイラを起した、しめて文明の空気を呼吸せしめ得るものぞ<sup>③</sup>」、「朝鮮の婦人は至つて卑屈なものと云はれて居ります位で、妾達から見ますと随分馬鹿げたこともございますが、是も永い間馴れに馴れて了つて所謂病膏盲に入るといふやうな姿なのですから今更其風を改良するといふのも、却々骨の折れることでございませう……<sup>④</sup>」と。彼女らの目に映った朝鮮は、文明の空気を吹き込む外部からの助けがなければ、自らは旧慣・旧習・旧態から抜け出せない無気力な病人の姿であった。

また、朝鮮人は時間觀念がなく、マナー・礼儀が不足し、公共意識・秩序意識・国民觀念が養われていないと指摘した。例えば、「彼等【朝鮮人】は猜疑心深く、竊聞をしたりする事を何とも思ひません。又思想が単純なものにも依りませう

が、一体に徳義の觀念が至つて薄く、他人の品物を取ることを何とも思はず、仮令一度とつても見露された時に返却しざへすれば、即坐に罪は悉く消去つてしまふものと思つて居り……」<sup>55</sup>、「実の上、皇室より下庶民に至る迄、国家とか、団体とか、公共とかの考は片影だもなく、唯自分の安逸、榮華を計りて生息せるのみ」と。彼女たちは、人々の行動を観察し、朝鮮人には近代意識が生成していないという判断を下したが、遅れた朝鮮・野蠻な朝鮮人という見方は、彼女たちのこうした近代啓蒙主義的な意識の発露でもあった。

彼女たちにとつて朝鮮は、ただの遅れた異国ではなく、親子関係、師弟関係、姉妹関係の国として認識された。日本と朝鮮の関係について、「彼我の関係、単に隣国たるに止まらず、親子の愛あり、師弟の義あり……」<sup>56</sup>と考えたり、特に日本女性と朝鮮女性の関係については、「今や日本婦人は身にしてみてもわが身を省み、わが持てるものを与へて他を導くてふ姉たる資格を養はなければなりません」<sup>57</sup>と認識した。つまり、日本女性は朝鮮女性に対して母・姉の立場に立つと考えたが、それは他民族を支配して「帝国の女性」（植民地本國の女性）の地位を得た者の自己認識であった。

こうした「帝国の女性」の自己認識は、朝鮮支配に當つて日本女性の果すべき役割は何かに関する考え・議論に裏付けられていた。「朝鮮婦人は我が新姉妹なり、之をして、わが国民性に同化せしめ、新文明の恩沢に浴せしむるは、先進者たる内地婦人の義務たるのみならず、我が日本の政策としても、至緊至要の事なり」<sup>58</sup>と、日本女性の役割は、朝鮮女性・家庭の教化・同化に求められた。<sup>59</sup>そこで、近代国民国家の性別役割分業論に依拠して展開される帝国主義の本質が露わになるが、言いかえれば、日本の膨張・帝国主義によって日本女性の領域は、自國の家庭から他民族の女性や家庭まで拡張すると考えられたのだった。近代国民国家のジェンダー秩序としての性別役割分業やジェンダー規範としての良妻賢母主義を、帝国のなかに拡散していこうとする日本帝国主義の断面を垣間見ることができよう。

朝鮮女性・家庭の教化・同化を日本女性の役割とみる考えには、外から隔離され生活する朝鮮の両班階層の女性には女性しか接近できないという朝鮮の文化的環境が考慮されており、社会改良は家庭改良からという視点に支えられていた。

「社会の改善は家庭に初まり、家庭の改善は婦人の方寸に存すること今更事新しくいふまでもなき事なり。而して韓国の如く、婦人の閉居を以て俗とせる国に於いては、其婦人の見聞狭く、固陋をのみ黙守して、新進研究の精神に乏しきは自然の傾向なり。而して、男子には同国人にすら接近せざる国柄なれば、此国を文明に導き、此家庭を改善せしめんには、今日の場合、ただ一日本婦人の手に倚るの外なし」といふ。

いずれにせよ、朝鮮・朝鮮女性の教化・同化問題は、植民者として朝鮮に渡つて暮らしている日本女性にとっては、直視せざるを得ない問題だった。次の例から分かるように、彼女たちは、在朝日本女性の啓蒙者としての使命を強く意識し、在朝日本人の傲慢な振舞いに対し反省を促し、また本国から女性たちが使命感を持つて渡航するよう呼びかけた。

「此の時に当り新附の民に、衷心よりの同情を注ぎ同化誘導に勉むべき事は、日本人の何れも等しく負へる責任にて候が、殊に当地【朝鮮】に在るものは、直に朝鮮人に接し居り候間、其の責任は殊に大なるものにて候。在住日本人も少しく態度を慎しみて、今迄の如く餘り惨酷なる待遇を為すが如き事なく、親切に指導し行くべき事と存じ候。又之迄の如く腰掛けの様な有様より脱して、此所に永住し、戸籍も移す位にして、健全なる家庭生活を営み、朝鮮人に模範を示す位の意気込みあらまほしく存候。夫れには日本婦人も少しく当方の事情をよく知りて、玄海位何のその、一人で押し渡る位の立派な覚悟と勇氣とがあらまほしくと存候」<sup>④</sup>

日本女性の朝鮮認識は、遅れた朝鮮・妹たる朝鮮女性という上からの視線と、姉たる日本女性の使命という啓蒙意識を持ち合わせている。その認識は、当時、日本社会に広がっていた朝鮮認識や帝国における日本女性の役割論と何ら変わりのないものだった。しかし、その共鳴・拡散こそが、日本帝国を支える人的基盤の広がりを示すものであったと言えよう。そしてこうした認識の広がりのなかで、日本人女教員をコロニアル・ミッシヨナリーとして朝鮮に送りだす帝国の力量も育つていったのだろう。次章では、日本人女教員は朝鮮にどれほど送り出されたのかをみる。

- ① 永原和子「『婦女新聞』にみるアジア観」『婦女新聞』を読む会編、前掲書、九七～一二三頁。ピーター・ドウス「朝鮮観の形成——明治期の支配イメージ——」ピーター・ドウス・小林英夫編『帝国という幻想——「大東亜共栄圏」の思想と現実——』（青木書店、一九九八年）四一～七一頁。趙景達「近代日本における朝鮮蔑視観の形成と朝鮮人の対応」三宅明正・山田賢編『歴史の中の差別——「三國人」問題とは何か——』（日本経済評論社、二〇〇一年、六七～一〇六頁。南富鎮「近代日本の朝鮮人観の形成——総合雑誌『太陽』と『朝鮮』を軸にして——」筑波大学近代文学研究会編『明治期雑誌メディアにみる（文学）』（佐藤印刷株式会社筑波営業所、二〇〇〇年、四六～六九頁。小園崇明「一九〇〇年代の『婦女新聞』にみる（朝鮮）の女性——構成される他者・（良妻）論を背景に——」『専修史学』専修大学歴史学会、第四四号、二〇〇八年、六六～九六頁など。
- ② 例えば、安田靖子は、一九〇七年八月に朝鮮に渡って二カ月後に、「最初私は韓国を余りに野蛮視して見くびって居ましたので（甚だすまぬ次第ですが）予想と違ひ事々に案外するばかりで、自分ながら可笑しさに堪へられないので御座います」（銀南浦まで（六八））『婦女新聞』第三八七号、一九〇七年一〇月七日、四頁）と語った。ここで安田は、朝鮮に渡って考えが変化した点を強調しているが、全体的には彼女も他の日本女性も、遅れた朝鮮・野蛮な朝鮮人という見方からの報告を行った。
- ③ 例えば、木村雁虎「朝鮮婦人」『女学世界』第一卷三～六号、一九〇一年。福島岩之助「朝鮮風俗談（一）」（七）『婦女新聞』第一七四～一八〇号、一九〇三年九月七日～一〇月一九日。金澤庄三郎「朝鮮の家庭」『女学世界』第五卷一〇号、一九〇五年、一一二～一一八頁。川尻琴湖「朝鮮の婦人」『ムラサキ』第七卷一〇号、一九二〇年、四〇～四六頁など。
- ④ 萩原夫人「韓国の婦人」『婦女新聞』第二七九号、一九〇五年九月一日、六頁。
- ⑤ 岡部子爵夫人談「韓国貴婦人の交際」『女学世界』第五卷一四号、一九〇五年、三三～三九頁。
- ⑥ 伊藤富貴子「朝鮮貴族の家庭を訪問して感じた事」『婦人世界』第五卷一四号、一九一〇年、四八～五一頁。
- ⑦ 目賀田婦人談「朝鮮婦人の交際振り（上）・（下）」『婦女新聞』第三一四・三一五号、一九〇六年五月一四日・二二日。同「朝鮮の婦人」『婦女新聞』第五三七号、一九一〇年九月二日、四頁。同「朝鮮に就て知つて居るべきこと」『家庭』日本女子大学校、一九一〇年一〇月号、一七～二二頁。同「朝鮮の婦人」『ムラサキ』第八卷一、一九一一年、二八～三一頁。
- ⑧ 他に日本女子大学校卒業生として朝鮮に渡り、朝鮮について書き記した人がいるが、どのような立場の人かは分からない。秀子「韓国たより」『家庭週報』第七四号、一九〇六年八月二五日、四頁。陶子「朝鮮の女」『家庭』日本女子大学校、一九一〇年一二月号、三〇～三三頁。
- ⑨ 安田靖子については、菅原ユリ「일본인여성 아스다 아스코의 대조선인식（日本人女性安田靖子の対朝鮮認識）」『女性と歴史』韓国女性史学会、第一二集、二〇一〇年、一五一～一八七頁を参照。
- ⑩ 『婦女新聞』第三八一～三八七号、一九〇七年八月二六日～一〇月七日。
- ⑪ 『婦女新聞』第三八九～四三七号、一九〇七年一〇月二二日～一九〇八年九月二八日。
- ⑫ 『婦女新聞』第四五三～四六五号、一九〇九年一月二五日～四月九日。
- ⑬ 『婦女新聞』第四九〇～四九六号、一九〇九年一〇月一日～一月

一二日。

⑭ 萩原夫人、前掲書。

⑮ 目賀田逸子「朝鮮婦人の交際振り(下)」『婦女新聞』第三一五号、一九〇六年五月二日、三頁。

⑯ 奥村五百子に關しては、任展慧、前掲書。鈴木裕子、前掲書を参照。

⑰ 奥村五百子「朝鮮觀光談」『女学世界』第二卷七号、一九〇一年、一六七頁。

⑱ 奥村は、一九〇五年に櫻楓会で講演を行い、朝鮮での経験も触れた。「奥村五百子氏談片」『家庭週報』第四〇号、一九〇五年一月八日、二頁。

⑲ 金森京子「同情に堪へぬ朝鮮貴婦人の生活」『櫻楓会通信』第三二号、一九一〇年、五六頁。

⑳ 同上、五七頁。

㉑ その他に、京城みやこ、京城西さは子という名による記事が、多く投稿されており、これらも、朝鮮の風景、風習、生活等を書き記したものである。

㉒ 京城支局一記者「朝鮮愛国婦人会(つづき)」『婦女新聞』第五七五号、一九一一年五月二六日、六頁。

㉓ 京城一記者「朝鮮婦人と養蠶事業(つづき)」『婦女新聞』第五八二号、一九一一年七月一四日、六頁。

㉔ 塚本はまは、一八八五年に東京師範学校女子部に入學し、一八九〇年に女子高等師範学校を卒業(第一回)した。塚本は、女子高等師範学校(一八九七年〜一九〇〇年)等で教える一方、家政学書を出版した。一九〇〇年刊行の『家事教本全』は、各女学校から広く採用された。また、一九〇六年には『実践家政学講義』を刊行するなど、彼女は、日本家政学を開拓した第一世代家政学者である。

㉕ 塚本はま「韓国」『櫻楓会会報』第一四号、一九〇八年、六六〜七

七頁。

㉖ 「居留民が生活の程度は、一般に高く、新開地の常なる、浮華遊惰の風、何所にも吹きすさみ、男子は飲酒遊蕩に耽り、女子は虚飾贅沢を耽ちとせず、労働をいやしむ習ひ上下通じて行ばれ、祖国の体面を穢すなどといへる理由をとなへて、豪奢を衒ひ、安佚をむさぼり、婢僕小僧番頭のたぐひに至るまで韓人を駆使するに優等国民ぶりて、惻隱憐憫の念少なく、酒やの御用ききも亦例の「チゲケン」背負子で運搬する運び屋」をして、炭薪酒醬油の類も、花客の家に運ばしめ、自身は懐手にして彼れ等を叱咤するのみなるは、一種の奇觀といふべし。……朱に交れば赤くなる世の諺に洩れず、男も女も、官吏も商人も、下女も馬丁も、劣等国民を交りて、その劣等なる所以を学び、知らず識らず、自ら品位を落として、劣等国民となり下るは、猶忍ぶべし、年に幾度か内地と相往來して、美麗なる莖行を輸入し、風流なる醜体を伝ふるに至りては、まづその功績をたたふる前に、その罪惡を責めざるべからず」塚本はま、前掲書、七五〜七七頁。

㉗ 一櫻楓会員「韓国瞥見」『家庭週報』第七八・七九号、一九〇八年九月二九日・一〇月二三日。

㉘ 渡邊常子「朝鮮旅行記」『婦人新報』第一七七・一七八号、一九一二年。

㉙ 小橋三四・柴田とう「朝鮮よりのハガキ」『櫻楓会通信』第三三号、一九一〇年、五〇〜五九頁。

㉚ 廣瀬咲子「本部からの珍客——朝鮮婦人との会合——」『櫻楓会通信』第三四号、一九一〇年、三七〜三八頁。

㉛ 社会部「朝鮮婦人内地留學費募集の成績」『櫻楓会通信』第三五号、一九一一年、二二〜二五頁。

㉜ 朝鮮へなぜ渡ったかは分からないが、他に朝鮮について書き記した女性として辰巳柳子(「朝鮮の婦人」『婦人界』第三卷七号、一九〇三

年、九四（九八頁）がある。

③③ 一櫻楓会員、前掲書（七八号）、三頁。

③④ 辰巳柳子、前掲書、九四頁。

③⑤ 秀蘭女史「鎮南浦より（二七）」『婦女新聞』第四二〇号、一九〇八年五月二五日、四頁。

③⑥ 一櫻楓会員、同上。

③⑦ 塚本はま、前掲書、六六頁。

③⑧ 「姉となりし日本婦人——最もめざましき今年の出来事——」『家庭』日本女子大学校、一九一〇年二月号、三頁。

③⑨ 社説「朝鮮貴婦人の歓迎に就て」『婦女新聞』第五四五号、一九一〇年一〇月二八日、一頁。

④⑩ 当時、朝鮮女性・家庭の同化に当る日本女性の姉たる役割を否定的に捉える意見が全くなかったわけではない。次の引用文はその一例である。これは、朝鮮・朝鮮女性の同化に対する日本の過剰な自信に警鐘を鳴らす立場で表わされており、比較的長年、朝鮮を見てきた者の立場から、より多面的に朝鮮を見るよう促している。「日本の女子が朝鮮を開発誘導し得べしと思ふは、恐くは誤りである。朝鮮の女子は勤勉、快活で、吾輩は支那も、安南も、ビルマも、サイアムも、馬來

## 第二章 日本人女教員は朝鮮にどれほどいたか

### 第一節 日韓併合以前の朝鮮における日本人女教員

一八七六年の日朝修好条規の締結以後、開港地や漢城（後の京城）に日本人居留民の移住が増加し、日本人教育も始まった<sup>①</sup>。しかし、就職に困る教員希望の日本女性に対し、日本人女教員が不足する朝鮮に渡ることを奨励する当時の記事か<sup>②</sup>

諸島も、印度も知って居るが、亜細亜の亡國で朝鮮民族程有望なるものは無い。而して朝鮮の有望なのは、朝鮮婦人の優れて居るので証明される。少し教育すれば朝鮮の女子は日本の女子より遙かにエラクなる。日本の女子は総べてに於いて、ヒッコミ算段で、臆病であるが、朝鮮の女子は極めて進取的である。女子のあんなに勤勉で、快活な民族は決して衰亡するものでない。現今は妙な習俗——習俗といふよりは社会的の法令（即ち文公家礼やその他過度に朱子学を強行するより）によりて、女子は妙な束縛を受けて居るが、一旦これが解ければ（而して事実には十分解けつつある）、朝鮮婦人といふものは恐るべきものである。故に何時までも日本の女子は、朝鮮女子の姉分で行けるものと自信するのは、日本女子の大誤りで、十年も出ぬ中に朝鮮婦人は日本婦人を圧倒するに至るは吾輩の明言して憚らぬところである」長井金風「合邦後の朝鮮」『家庭』日本女子大学校、一九一〇年一〇月号、一六一—一七頁。

④① 社説「在韓婦人の任務」『婦女新聞』第三八八号、一九〇七年一月四日、一頁。

④② 廣瀬咲子「合邦に対する在留邦人と朝鮮人の態度」『櫻楓会通信』第三三号、一九一〇年、五四頁。

表1 1909年度における日本人学校と日本人教員

学 種	学校数	生徒数		教員数
		男 子	女 子	
小学校	102	6,712	5,918	363
高等女学校	3	-	397	37
中学校	1	154	-	8
商業学校	2	143	-	20
専門学校	1	30	-	20

注1) 教員数には兼務者も含む。

2) 性別教員数は示されていない。

出典：朝鮮総督府『学事統計』1910年度。

ら推測して、この時期の朝鮮における日本人女教員は少数で、主に小学校と高等女学校へ配属されたと考えられる。

表1の日本人高等女学校の三校は、一九〇六年開校の釜山高等女学校（前身は一九〇二年に発足した釜山小学校補習科）、一九〇七年開校の京城高等女学校（前身は一九〇四年に開設された京城女学会）、一九〇八年開校の仁川実科高等女学校（前身は一九〇四年に開設された仁川小学校補習科）である。日本人が通う男子中等学校として最初に釜山商業学校が一九〇六年に、京城中学校が一九〇九年にそれぞれ設立された点、また、一九〇九年度の中等学校における女子生徒数が男子生徒数より多い点から見て、朝鮮における日本人女子中等教育機関は、男子のそれより先んじて発足し、拡張していったことがわかる。それは、小学校卒業後の進学率が低いとはいえ、女子生徒の場合は内地留学よりなるべく親元で教育させたいという居留民の要望によって生じた特徴であろう。③ともあれ、小学校教員三六三人のうちの約二割（一九一〇年度の女教員の比率は約二三％）、高等女学校教員三七人のうちの約二割（三校の高等女学校に各二三人が勤めていたとみて）の日本人女教員がいたと考えられる。

もちろん、当時、日本人教員は朝鮮人教育も担っていた。次の表2は、一九〇九年度の官公立朝鮮人学校および教員に関するものである（同年度の私立学校統計はない）。日本人女教員は普通学校と高等女学校で教えていたに違いないが、どの程度であったかは推測できない（一九一〇年度の統計にも性別教員数は無表記）。高等女学校の場合は、官立漢城高等女学校（一九〇八開校）の他、淵沢能恵が設立に関与した私立淑明高等女学校（一九〇六年開校）に、日本人女教員がそれぞれ三〜四人程度いたと考えられる。④しかし、一八八六年以来、朝鮮で開校された梨花学堂を始めとするミッション系女学校に



表2 1909年度の朝鮮人学校と教員

学 種	学校数	生徒数		教員数		
		男 子	女 子	日本人	朝鮮人	外国人
普通学校	123	15,465	689	156	516	4
高等女学校	1	-	143	4	5	-
高等学校	2	248	-	13	14	-
法学校	1	138	-	10	11	-
外国語学校	1	420	-	8	27	4
師範学校	1	206	-	9	7	-
成均館	1	30	-	-	7	-

注・出典：表1と同じ。

は進出しておらず、彼女らがミッション系女学校で勤めるのは、一九一〇年代後半、朝鮮総督府の学校認可のために日本人教員を雇用するようになってからのことであろう。

当時、日本女性向けの雑誌や同窓会の機関紙には、朝鮮に渡っている日本人女教員が紹介されたり、彼女たちからのたよりが掲載されたりしている。例えば、日本女子大学校同窓会櫻楓会は、一九〇八年に卒業生三人が教員として朝鮮で働いていると報告した<sup>⑤</sup>。また、女子高等師範学校（後の東京女子高等師範学校）卒業生として併合前に朝鮮に渡った二人（そ

れぞれ釜山高等女学校と漢城高等女学校に勤務<sup>⑥</sup>）のうち、内山美は、『櫻蔭会会報』に手紙を寄せ、釜山高等女学校について紹介した<sup>⑦</sup>。

このように女子中等教員を輩出していた女子高等教育機関の同窓会は、人数は少ないが朝鮮に渡って女子教育に従事している卒業生に注目し、関心を寄せている。そこで帝国の担い手としての女教員への期待が見受けられるが、この点は、第三章で取り上げる。

## 第二節 日韓併合以後の朝鮮における日本人女教員

最初の公刊年度は明確ではないが、朝鮮総督府は、一九一〇年度の『学事統計』をはじめとして、一九四三年度まで『朝鮮諸学校一覽』を刊行した。これらの教育統計から朝鮮に日本人女教員はどれほどいたかを知ることができる。しかし、一九二九年度以前の官公私立の初・中等学校および高等教育機関における教員数は、民族別と性別に示されていない部分がある。一九二九年度から四三年度までの日本人女教員の推移は、以下の表3の通りである。

表3 朝鮮における日本人女教員数の推移

年 度	初等教育			中等教育			高等教育	合 計
	日本人 学 校	朝鮮人 学 校	小 計	日本人 学 校	朝鮮人 学 校	小 計		
1929	622	389	1,011	147	85	232	2	1,245
1931	645	362	1,007	180	77	257	3	1,267
1932	651	343	994	175	88	263	14	1,271
1933	682	356	1,038	194	97	291	2	1,331
1934	685	370	1,055	202	79	290	2	1,347
1936	734	431	1,165	179	97	276	5	1,446
1937	752	506	1,258	215	104	319	6	1,583
1938	774	588	1,362	232	100	332	11	1,705
1940	887	1,266	2,153	257	122	374	24	2,551
1941	1,011	2,029	3,040	256	145	401	30	3,471
1942	1,053	2,591	3,644	289	170	459	33	4,136
1943	1,206	2,844	4,050	275	151	426	47	4,523

注1) 1938年に従来の日本人学校と朝鮮人学校の名称が統一されるが、実際には新設学校を除けば依然として分離教育が維持されていたので、1938年度以降も日本人学校と朝鮮人学校を分離して示した。

- 2) 日本人初等学校：官公立小学校（41年からは国民学校）  
 日本人中等学校：公私立の中学校・高等女学校・実業系学校  
 朝鮮人初等学校：官公私立普通学校（38年からは小学校、41年からは国民学校）・簡易学校等・初等レベルの各種学校  
 朝鮮人中等学校：公私立の高等普通学校・女子高等普通学校・実業系学校・中等レベル各種学校  
 高等教育機関：帝国大学・専門学校・師範学校・専門レベルの各種学校

3) 教員数には兼務者も含む。

4) 1932年度に高等教育機関の日本人女教員数が急増したのは、私立専門学校に兼務する12名が含まれているからである。38年度以降は、師範学校に勤める日本人女教員数が増えた。

出典：朝鮮総督府『朝鮮諸学校一覧』1929年度～1943年度（30年度、35年度、39年度は欠落）。

朝鮮における日本人女教員は、一九四三年には四五〇人以上に達している<sup>⑧</sup>。併合前の一九〇九年に百十数人の規模であったと推定すれば、三十五倍以上増加した。初等教育の量的拡大<sup>⑨</sup>によって初等教員数が拡大したことに、その最大の理由があるろう。

初等学校における日本人女教員は、一九三八年度までは朝鮮人学校より日本人学校に多くいたが、四〇年代は朝鮮人生徒の急増に伴い、朝鮮人学校に勤める者が多くなった。初等学校の日本人女教員の中には、朝鮮に設立された女子師範学校二校（京城女子師範学校・一九三五年設立、公州女子師範学校・一九三八年設立）から輩出された者も多い<sup>⑩</sup>。

その一方、中等学校における日本人女教員は、すべての年度において朝鮮

表4 朝鮮における女教員数の推移

年 度	初等教育				中等教育				高等教育				合 計
	日本人女教員	朝鮮人女教員	外国人女教員	小 計	日本人女教員	朝鮮人女教員	外国人女教員	小 計	日本人女教員	朝鮮人女教員	外国人女教員	小 計	
1929	1,011	928	51	1,990	232	53	14	299	2	5	11	18	2,307
1931	1,007	1,005	57	2,069	257	74	15	346	3	10	15	28	2,443
1932	994	1,024	39	2,057	263	131	36	430	14	9	13	36	2,523
1933	1,038	1,081	38	2,157	291	132	40	463	2	10	15	27	2,647
1934	1,055	1,217	27	2,299	281	138	31	450	2	12	14	28	2,777
1936	1,165	1,412	28	2,605	276	138	33	447	5	11	12	28	3,080
1937	1,258	1,660	26	2,944	319	145	26	490	6	11	12	29	3,463
1938	1,362	1,750	14	3,126	332	182	22	536	11	20	13	44	3,706
1940	2,153	2,462	3	4,618	374	177	25	576	24	30	12	66	5,260
1941	3,040	3,000	2	6,042	401	195	3	599	30	34	2	66	6,707
1942	3,644	3,177	3	6,824	459	187	-	646	33	59	1	93	7,563
1943	4,050	3,256	-	7,306	426	167	-	593	47	19*	-	66	7,965

注・出典：表3と同じ。

\*1942年度には私立専門学校に40人の朝鮮人女教員がいたが、43年度には5人に減った。

人学校よりも日本人学校の方に多かった。朝鮮には男女高等師範学校が設置されず、日本人女子学生が朝鮮の女子専門学校に入学するケースも多くなかった<sup>①</sup>ので、彼女たちのほとんどは、日本内地で高等教育を受けたと思われる。

高等教育機関のなかで、女子師範学校で教える日本人女教員は、一九三八年度以降、規模的には少人数に過ぎないが、増えつづけた。京都女子高等専門学校出身で公州女子師範学校で勤めた吉田重の例からみて、中等学校で教えた女教員たちと学歴の面では差がほとんどなかったらう。

日本人女教員を他の民族の女教員と比較してみよう。日本人女教員と朝鮮人女教員は、すべての学校においてほとんど年々増加し続けた。しかし、外国人女教員（ほとんどがキリスト教婦人宣教師）は三〇年代半ばを境に減り続けた。全体的に日本人女教員が朝鮮人女教員より多い（一九四三年度の日本人女教員は四五三三人、朝鮮人女教員は三四四二人）が、両者の人数の差が特に顕著なのは、中等学校においてである。例えば、一九四三年度、公私立高等女学校（七六校）における日本人生徒数（二六四七八人）と朝鮮人生徒数（二六一二七人）はほぼ差がないのに、日本人女子教員は三二六人、朝鮮人女教員は一〇八人であった（表4の数字には実業系や各種中等学校に勤務す

る教員数も含まれているので差異がある<sup>③</sup>。朝鮮には女子専門学校が少なく(三校)、朝鮮人女性が中等教員になるためには、日本留学が必要だった。そのような朝鮮人女性は少人数で、高等教育を受けた日本人女性が朝鮮に渡って女子中等教育を担ったのだろう。中等学校に進学する朝鮮人女子学生は、初等学校以上に日本人女教員の影響を受けると言えるよう。

以上で、朝鮮における日本人女教員は年々増加していき、朝鮮人女教員などより規模が大きく、特に中等学校において遙かに上回っていた。彼女たちは、朝鮮人生徒や次世代の植民者の教育に従事したが、一九三〇年代後半からは初等学校における朝鮮人生徒の教育により多く当てられており、女子中等学校の場合は、植民地統治時期を通して朝鮮人女子生徒より日本人女子生徒の教育を担当するものが多かった。しかし、こうした日本人女教員数の推移や特徴がどうであれ、大多数の朝鮮人の生徒たちは初等学校または女子中等学校で彼女たちの教えを受けていた。この点から考えなければならぬのは、朝鮮人生徒に対する彼女たちの影響はどつたのかという事である。次章でこの点について取り上げる。

① 併合前の朝鮮における日本人教育の成立と展開については、稲葉雄「旧韓国→朝鮮の「内地人」教育」(九州大学出版会、二〇〇五年)を参照。

② 「韓国の日本小学校にては従来教員を得るに苦みしが当局者の奨励と内地よりは比較的高級を得らるゝと近來交通の便開かれしため渡航者も多くなり現今にては五百戸以上位の日本居留地にては容易に良教員を得るに至りたるが女教員の渡航は尚極めて少き由なれば内地に口を求めて得ざる女子は相当の手續を履みて渡航すること有望なるべしといふ」(「韓国に於ける小学女教師」「婦女新聞」第二八三号、一九〇五年一〇月九日、二頁)。

③ 第一章で紹介したように、日本女子大学校卒業生として朝鮮で工場を経営する夫とともに朝鮮に渡つた廣瀬咲子は、「此の地の高等女学

校は中学よりも早く設立されました。其の理由は母親達がとりわけ女兒を教育の為に本国に残して参る事を嫌がりますので、従つて婦人の移住が遅れる其れ等の必要が迫つて高等女学校の設立を急いだと云ふ事でございます」(「京城土産」「家庭週報」第一八八号、一九〇九年五月二日、二頁)と報告した。

④ 「婦女新聞」の「京城だより」(第四八八号、一九〇九年九月一七日、六頁)によれば、漢城高等女学校に赤穂千春学監の他、三人の日本人女教員が勤めていた。

⑤ 日本女子大学校同窓会校楓会「韓国京城支部」「校楓会通信」第二号、一九〇八年、一六頁。

⑥ 稲葉雄、前掲書、二〇〇一年、三〇五〜三二二頁にも紹介されている。

⑦ 内山美「金山より」『櫻陰会会報』第二号、一九〇七年、四三―四五頁。

⑧ 一九四三年度における初等・中等・高等学校の教員全体は、朝鮮人男子教員（二七五四六八）、日本人男子教員（二二五六二一）、日本人女教員（四五二三人）、朝鮮人女教員（三四四二二人）の順に人数が並ぶ。朝鮮総督府『朝鮮諸学校一覽』一九四三年度。

⑨ 金富子「植民地期朝鮮の教育とジェンダー——就学・不就学をめぐる権力関係——」（『世織書房』二〇〇五年）を参照。

⑩ 一九三五年から四二年度まで（三九年度欠落）、二校の女子師範学校の講習科（在籍期間一年）、演習科（在籍期間二年）、尋常科（在籍期間四年）の日本人卒業生は、約二〇〇〇人と推定できるので（朝鮮総督府『朝鮮諸学校一覽』一九三五年度～四二年度。各年度の日本人卒

業予定者を集計すれば一九六四人）、一九四三年度の日本人女教員の約半数は、朝鮮の女子師範学校出身であろうと推測できる。

⑪ 一九四三年度、教員免許が得られる女子専門学校に在学していた日本人女子学生数は、一九二五年設置の梨花女子専門学校に五人、一九三七年設置の淑明女子専門学校に九六人であった（朝鮮人女子学生は、それぞれ六一七人と一九八人）。同年度、京城女子医学専門学校には、日本人女子学生八六八人、朝鮮人女子学生二二四人が在学していた。朝鮮総督府『朝鮮諸学校一覽』一九四三年度。

⑫ 吉田重「夕映」（三ケイ社、一九九八年）。

⑬ 朝鮮総督府『朝鮮諸学校一覽』一九四三年度。

⑭ 拙著『朝鮮女性の知の回遊——植民地文化支配と日本留学——』（山川出版社、二〇〇五年）を参照。

### 第三章 日本人女教員はコロニアル・ミッシヨナリーとしていかに認識されたか

第一章で述べたように、一九世紀末から日本で遅れた朝鮮・野蛮な朝鮮人という見方・イメージが広がっていった。遅れた朝鮮をいかに教えるのかは、植民地支配を本格化した帝国の大きな課題となり、政治家や教育官僚をはじめ、教育界・言論界は、こぞって朝鮮教育論を打ち出した<sup>①</sup>。

そこで浮上したのが、日本人女教員を朝鮮に送ることだった。誰がいかに遅れた朝鮮を教えるかは、帝国の担い手がいかに構想されたかの問題である。ひいては、日本人は他国家・他民族を包摂する帝国をいかなる帝国意識をもって構想したのかを知ることにつながる。本章では、日本人女教員に期待された役割と、日本人女教員自身の意識を検討する<sup>②</sup>。

第一節 日本人女教員に期待された役割は何か

朝鮮支配の方法論が続出するなか、遅れた朝鮮に日本人女教員を送ることは、第一章で取り上げた朝鮮認識から導かれる当然の結論だったと言えよう。朝鮮を変えるためには、何より先に朝鮮女性や朝鮮の家庭を教え導き、日本に同化させねばならないが、朝鮮女性は内房で生活し、そこへの出入りは外部男性には許されない。そこから、当然、朝鮮人を教える日本人女教員派遣の案が練られ、打ち出されたのである。

次の『婦女新聞』社説は、教育による朝鮮人の教化を朝鮮支配の最上の方法と見る立場に立つて、変化を強いるのではなく、朝鮮人が内心から変化を望むような教育の効果をあげるためには、優先的に朝鮮女性を教育すべきだと主張し、日本人女教員派遣の必要性を説いた。

「韓国に於ては、婦人の勢力案外に強くして、如何なることをなすにも、まづ婦人を動かさずは、到底根本に立入つて十分なる効果を奏する能はざる也。……韓国教育を實行せんとするには、まづ彼等婦人を動かさざるべからず、若しこの手段に出ですして、ただ単に外部より之が教育を強ふも、その内部の反撥を打破するに堪へずして、終に無効に屬せんのみ。然り、韓国の教育事業は、先づその女子教育殊に上流社会の女子教育より始めざるべからざる也。而して、その女子教育の任にあたるもの、又必ず女子の手に俟たざるべからざる事情の存す。そは、韓国にては甚しき男女隔絶主義行はれ、男子にして、表面より婦人に接近し、婦人の間に働くことは難ければ也。これ吾人が、我が婦人界に向つてここに声を大にして、韓国教育の事を云為する所以也。幸にして我が婦人界には、既に幾多の人才あるを信ず。学殖あり、識見ある女子は、今日の好機を逸せず、我が肉の肉、骨の骨たるべき韓国の為に大も奮起すべき也」<sup>⑤</sup>

日本人女教員に大きな期待を抱くこの考えは、後の「韓国教育の第一歩を鞏固にせんがため、我国より、まづ一二百の女教育家を遣つて以てこの任にあたらせるといふ事である。今日、我国に於ける女教師の中には、喜んで韓国（のみならず支那でも）の新教育の任に當つて見たいと常に望んでをるものが少なくないさうである」という、具体的な提案からも確認される。

そして、日韓併合という転換を迎えると、『婦女新聞』は、帝国はなぜ日本人女教員を必要とするかについて以前に示した考えを踏襲したのち、いかなる日本人女教員が必要かについて、以下のように付け加えた。そこで、朝鮮に渡るすべの日本女性は、西洋の宣教師のような存在にならなければならないとした点は興味深い。

「吾等は両者【女医と女教員】を職業とせる婦人が、成るべく多く渡航して此国家の裏面的事業に従事せん事を望む。……朝鮮に要するは、高尚なる学科教師よりも寧ろ細物細工物等初歩の手芸にて事足れば、尋常小学専科教員位の技術あらば可なりと聞く。……殊に吾等は、現に朝鮮に在住せらるゝ婦人に対して、余力を此の裏面的国家事情に致されん事を切望す。……要するに、我が婦人の凡てが宣教師の如き考になり、彼等の神を思ふが如く我が国家を思ひ、機にふれ折にあふ毎に、同情を以て彼の婦人を指導するに付とめば、其の感化は、彼の婦人のみに止らず、間接にはわが政府及び民人の施設する表面的事業をして、進捗を容易ならしめん」<sup>⑤</sup>

以上のような、遅れた朝鮮に日本人女教員を派遣することは、いずれ朝鮮で実施されるはずの公教育に必要な日本人女教員の充員という教育政策の観点からみれば、いかにももつともな意見に過ぎないかもしれない。しかし、その意見は、主体的で自立した女性を育てる女子教育は、男性・社会・国家のためにも必要であるという観点を持ち、社会に出るに十分な知識と志を持つ女性たちを高く評価した人（福島四郎<sup>⑥</sup>）が、植民地に対する帝国の支配の確立のために日本女子教育の経験と成果を活用することを主張したものに他ならない。そこには帝国の支配の成立が日本女性にもたらす新しい可能

性も意識されていた。しかし、朝鮮が必要とする日本人女教員は、最高の学歴や学問を有する人物より、手芸に詳しい小学校教員を想定するなど、日本と朝鮮の女子教育に差別を置くその考えは、日本女性に開かれる新しい活動を最初から萎縮させてしまうものだった。要するに、帝国意識は自国の女子教育の発展を抑圧する縛りにもなるが、その点が自覚されていたかどうかは不明である。

ともあれ、遅れた朝鮮に日本人女教員を送ることは、帝国が必要とする担い手を西洋の宣教師のような存在として捉える考えに結びついている。こうした帝国におけるコロニアル・ミッシヨナリーの役割論は、西洋宣教師とミッシヨンスクールが日本近代化に果たした役割を大いに評価する見方から来た着想だろう。それに、一九世紀末以来、日本に広がった朝鮮蔑視観を肯ずる優越者・支配者の特権（指導権）と「善良さ」が、日本の文明によって野蛮な朝鮮人の心を改めるといふ、コロニアル・ミッシヨナリーのモチーフを見出したのだろう。彼らは、頑固で、無礼で、怠け者で、不潔な朝鮮人、秩序意識も公共意識も国民意識も持ち得ていない遅れた朝鮮人に、文明の光を当て心を改めさせること（日本化）が、まさに「福音」であり、朝鮮人のための最良の道であると信じ疑わなかったのだろう。そして、それが帝国の安定と利益を生み出すとみた。

帝国の担い手をコロニアル・ミッシヨナリーのような存在として捉えた場合、彼らは朝鮮でどのような心構えで行動すべきであると考えられたのか。例えば、次の例から分かるように、彼らは（ここでは朝鮮に渡った日本女性）、大つばらに指導者として振舞つたり、大きな態度で押しつけたりする人ではない。自らが模範になることで、知らず知らずのうちに朝鮮女性を感化させ、尊敬の念を抱かせ、朝鮮人の内心からの同調を得て朝鮮家庭を文明化・日本化へ導く人となるべきだと考えられた。

「在韓婦人が、身を以て模範とし、親切を以て指導し、不知不識の間に彼等韓国婦人をして自覚せしむるにあらざれば、教育の普



及は望むべからず、家庭の改善は期すべからず、韓国を眞の文明の域に進めて、帝国の天職を全うすることは能はざるなり」<sup>⑦</sup>

「在韓の日本婦人は、自ら日本の婦人を代表せるものなる事を覚悟し、一挙手一投足にも、十分の注意を加へ、消極的には母国を辱しめざらん為め、積極的には彼等『朝鮮人』を感化して、欽慕せられ敬服せらるゝまで、其の身を慎まざるべからず」<sup>⑧</sup>

日本が朝鮮支配の理念として打ち出した同化主義は、日本人の中でもその理解や政策的な立場は多様だった<sup>⑨</sup>。その理解や立場によつて、誰が遅れた朝鮮人をいかに教えるのかという、帝国の困難を解決するのに必要な担い手に関する考えも同じではないはずである。例えば、自己の劣等や日本の優越を認め、やむを得ず朝鮮の日本化を受け入れる従順な朝鮮人の育成を目標にすることと、朝鮮人を改心させ、彼らを精神的に文化的に日本人に作り上げようとするものでは、必要になってくる帝国の担い手の質が違うのだ。

しかし、帝国におけるコロニアル・ミッショナリー役割論は、首尾一貫した帝国論として人々の植民地認識や国家政策に影響を与えていたかどうか分からない。ただここで言えるのは、朝鮮に渡る日本人女教員にコロニアル・ミッショナリーのマインドが求められたことだ。そして、そのことは、日本女性の中である程度自覚的に受け止められていたと思われる。その一例として、将来に帝国の女子教育を担う人材として養成を受けている女子学生の認識を挙げることができる。一九一七年度に学生有志による朝鮮・満州旅行<sup>⑩</sup>に参加した東京女子高等師範学校学生は、朝鮮における日本人女教員（以下に挙げた例には教員全般について書かれたが）は、同情、友愛、親和等の普遍的なヒューマニズムに満ちた、眞の勝利者として、遅れた朝鮮人を改める存在だとみた。

「ヨボ階級の人達〔労働者等の貧しい人〕をみて私は、ただもうみじめだといふ感にうたれた。うるほひもない。涙もない。荒みきつた生活をしみじみ可愛さうに思つた。……一時はやくめさめたばかりに一足さきき、文明にたどりついただけで、決して私達は

タイラント【tyrant 暴君】の様な心地であつてはならぬ。姉さん分といった様に、やさしくそろそろと導いてやらねばならぬ。侮る理由もなければ、壓しつける権利もない。同胞にはかほりない。威張るのが勝利者ではない。稍もすれば弱いもの、あはれなものに威張りたがる。強いやうだがこゝが人間の弱いところ。私は朝鮮人をみてしみじみこんなことを思つた。どんな優しい手をひろげても迎へたい。ひろい心で迎へたい」<sup>⑩</sup>

「未開な無頼な、彼等【朝鮮人】は、導くよりもまづ第一に、愛しなければならぬと思ふ。親和を以て、彼の心服を得てこそ、教へる事も、導く事もできるのではあるまいか。感服せしめるのみであつたならば、いつまでも不徹底に終らなければならぬ。真と愛とを以て接した時、初めてほんとうの融和ができるのではなからうか。……固く閉された彼等の個性を發展させ、遊惰となつてしまつた彼等に勤勞の樂しさと、尊さとを自覺させるのは、日本人の使命である。これは第一に、教育の力に俟つより外に仕方がない。茲に至つて、教育者の責任の大なるを切実に感ずる」<sup>⑪</sup>

また櫻楓会幹部として朝鮮を視察した日本女性は、日本人女教員が真に朝鮮人を理解し指導するためには、十分な朝鮮語を習得すべきだとして、次のように語つた。「若しも徹底した教育で、此朝鮮人を開発し啓蒙するにはまづ教師自身朝鮮語を十分に理解してゐなければならぬ。教師の過半は日本人である外に鮮人の教師がある。……ここに生活するに日本語さへあれは事足る故を以て鮮人に日本語で知識を注入することが出来るとしても、決して教育は徹底したとはいへぬ。彼らの思想を解する為に自由に朝鮮語を語る人がはじめて彼等を理解し指導し得るのではないかといふ、不安が胸底を往來した。鮮人の教師と生徒は朝鮮語をしらぬ、指導者の下に何事を企画するか実に恐ろしい事だと思つた。朝鮮教育に任する人はその言語の理解を第一要件として、出発点としてなさるべき前途を持つのだ」<sup>⑫</sup>と。ここでは日本人教員が朝鮮語を習得する理由として、朝鮮人と円満なコミュニケーションをとり、より彼らを理解するためだけでなく、朝鮮人が問題を起さぬよう事前に統制するための目的も認識された。彼女らは、コロニアル・ミッシヨナリーの置かれる難しい立

場を理解したのだ。コロナル・ミッシヨナリーは、遅れた朝鮮人を文明へ導くことが朝鮮人のためになると信じて疑われないが、朝鮮人も同じように考え信じているのだらうかと、朝鮮人の本心に対する募る不安と闘いながら、決して帝国の安定と利益に奉仕する自分の役割や立場を忘れることの出来ない人なのだ。

要するに、日本人女教員をはじめ、朝鮮に渡る日本女性にコロナル・ミッシヨナリーとしての役割が期待され、その点は、日本女性の中である程度共感を呼んでいた。次節では、日本人女教員が自分の役割をどのように見たのかについて考察する。

## 第二節 日本人女教員自身はいかに考えたか

第二章でみたように、かなりの規模の日本人女教員が朝鮮で日本人生徒や朝鮮人生徒を教えたが、自身の考えを表明した日本人女教員の例は少ない。たとえ見解が述べられた場合でも、それは公教育の教員（朝鮮支配の第一線に立つ者）という立場を意識した意見かもしれないし、戦後の回想記・聞き取り調査（男女教員）にも、朝鮮の子どもらを愛し、朝鮮の子どもたちからも尊敬された「善良な」教員の姿が多い（もともと「善良な」教員が多かったかもしれないが）など、教員の意識のうちで、国家や他から認められるものが記録に残りやすい。それゆえ日本人女教員の意識全体や時期別の変化等を明らかにするのは難しいが、ここでは、日本人女教員が自身の役割について述べた次の三つの例を用いて、彼女たちの中にあつたコロナル・ミッシヨナリー意識をみてみる。最後にそのような意識を持つ日本人女教員が果たした役割は何だったかについてふれる。

最初の例は、第一章でもあげたが、日韓併合の当時、朝鮮の私立女学校の教員であつた日本女子大学校卒業生の金森京子の考えである。彼女は、「同胞姉妹よ、韓土の赤き山を青くし、荒れたる畑に水々しき苗を作る責任は、愛する諸姉の手に存する事を自覚し給ひて、新領土の開拓を、唯に男子にのみ待つ事なく、進んで自ら玄海の浪を越え来給へよ。然ら

ば諸姉の前には広き働きの世界が開け、献身の誠心と実力と、忍耐とだにあらば、諸姉の欲するが儘に目的を実現し、此の気の毒なる婦人を、苦界より救ひ出す事が出来るのであります」と言う。彼女にとって日本人女教員とは、進んで新領土に渡る人、その荒れ地に文明の種を撒いて苗を育てる人、その地の惨めで苦痛に陥られている人を救い出す人、献身・実力・忍耐を備えている人であった。

次の例は、一九二一年、日本女子大学校を卒業して朝鮮の大邱高等女学校（日本人学校）に赴任して間もない浅井操の考である。彼女は日本人女学校の教員になるため朝鮮に渡ったが、貧困層の朝鮮の子ども、日本人に差別される朝鮮人、日本人と朝鮮人の分離教育などの朝鮮の現実を見て、次世代の植民者である日本人生徒に朝鮮人に対する正しい態度を教え、内鮮融和のために働く人材を養成するのが自分の役割だと自覚するようになったと述べた。

「汽車に体を運んで窓から外をながめますとまだまだここ【朝鮮】は内地よりも人が少いと思ひました。次に処々の山蔭から出てくる鮮人の汚いノラクラな風を見てなんともいひやうのない気持ちになりました。只子供が無邪気に遊んでゐるのを見ると流石にすなはな気持を味はせられました。そして是等の子供を本当に教育せねばならぬのだと思ひました。次に心を痛めましたのは心ない日本人の鮮人に対する態度です。それは買物にいつた時に知つたのでした。店の子僧までが可成立派な鮮人も人間として待遇してゐないので。私はその店で買ったものをたたきつけてやりたいとさへ思つたことも度々ありました。さうして暗い気持ちで、家に帰ることが多うございました。私は鮮人を知る機会もなくその外見を見たにすぎませんから、まだどれだけひどいことが行はれただけ鮮人が低いものかよくは分かりませんが、可成大きな女学校で内地の女学校に比して遜色のない或はそれ以上の学校でありますのに日本人のみの教育に従つて居りますが、可成大きな女学校で内地の女学校に比して遜色のない或はそれ以上の学校でありますのに鮮人は一人もゐません。……私はこれ等【日本人】の生徒に本当に正しい鮮人に対する態度を悟らせなければならぬと思つて居ります。これが私の大きな務めの一つです。そしてやがてはこれ等の小さい女の子が日鮮融和のために働く人になつて貰ひたいと思つ

て居ります」<sup>⑩</sup>

最後の例は、淑明高等女学校の創立にかかわった淵澤能恵の考えである。彼女は、「私が朝鮮へ参つたのは、天の使命と思ひます。慾得忘れて彼等娘等が、私と一処に働く氣に成つて呉れるのは何時の事かと、それ計り思つて居ます。朝鮮に在るは報恩の心です。昔朝鮮の開けて居た時は、我が国は導かれました。今は私共が少し進んで居るから、其方法を教へに参つたと云ふ考へです。今頃は日本の善政に依つて喜び懐くものが田舎の隅々まで行き渡らうとして居ります」と語つた。進んだ人が遅れた人を教え導くのは、進んだ人の天の使命に他ならないという。その進んだ人の「善良さ」は、朝鮮人の中で喜んで迎え入れられているという。

以上の三つの例から、朝鮮に渡つた日本人女教員の持つたコロニアル・ミッショナリー意識の一端を見た。これらの例から見えてくるのは、心から遅れた朝鮮人を助け、導くのを願う「善良な」日本人である。彼女らには邪悪な支配者の顔がない。彼女ら自身もそのような日本人を嫌悪する。もちろん、彼女らは、当時の殆んど日本人と同様、日本の朝鮮支配を正当かつ肯定的に捉え、日本の教えを朝鮮人にとつての「福音」として信じて疑わなかつた。その意味で、彼女らの意識は、外部から襲つてきた力の両面性、すなわち文明と暴力を同時に経験しなければならぬ朝鮮人の困難さと引き裂かれる思いを見ない、いや見るすべを持ち得ていない、支配者の独りよがりの、薄っぺらで通り一遍の、偽善的な意識だと見なし批判するのは容易いことかもしれない。しかし、ここで考えてみたいのは、「善良な」日本人が果たした役割は何だったかである。それによつて帝国の担い手としてのコロニアル・ミッショナリーの意義を知ることにならう。

淵澤能恵の教えを受けた趙慶喜（淑明女子高等普通学校卒業後、新潟県立相倚高等女学校に編入。さらに東京女子高等師範学校文科に入学、卒業後は東京文理科大学へ進み、一九三三年に文学士を取得）は、一九三六年に京城で亡くなった淵澤の訃報に東京で接し（当時、彼女は東京の実践女学校で教えていた）、『婦女新聞』に淵澤のことを回顧し、次のように述べた。「ですか

ら御自分の信仰を人にすすめることもありませんでしたし、内鮮融和なども積極的にはおつしやいませんでしたが、お傍に居ると和められるやうな温い先生の御人格が、積極的になさる以上に、立派に内鮮融和に役立つてゐますものねえ」と。

趙慶喜は一九二〇年代前半に淑明女子高等普通学校（元淑明高等女学校）で学んだ。一九一九年の三・一独立運動後、文化統治を標榜する朝鮮総督府の政策によって、朝鮮語の新聞や雑誌が出版されるようになり、学校も就学者も徐々に増えていき、朝鮮知識人の中からも、実力養成論者（独立運動に先んじて独立に必要な実力の培養を主張する立場）が支持を集めていった。また、一九三一年に勃発した満州事変は、朝鮮民衆に日本帝国の「強さ」を思い知らせた事件として、日本の朝鮮支配が短期間に終息しないかもしれないという不安が朝鮮人を襲った。次世代の子どもたちも親世代と変わらず日本帝国の支配下で生きていかなければならないとなれば、今以上に子どもたちに必要になってくるのは日本語の能力と学歴ではなからうかと親たちは考えたに違いない<sup>⑩</sup>。

こうして時間とともに日本の朝鮮支配は多様な意味で進行していくが、そのなかで、朝鮮女性を日本の教えに惹きつける力を發揮したのはコロナアル・ミツシヨナリーの意識を持った日本人女教員だったのではなからうか。遅れた朝鮮人と思う彼女らの「善良さ」（しかも、押しつけがましい態度がない）、彼女らの手にある文明の力と魅力、朝鮮女性の中には多く存在しない社会的地位を得た働く女性の存在感は、朝鮮の女の子らに大きな影響を及ぼしたのだろう。例えば、彼女らは、次の趙慶喜の事例から分かるように、あこがれの的だったり、模範だったりした。趙慶喜は、朝鮮女性最初の文学士として『婦女新聞』で報道されたが、そこで『趙が淑明女子高等普通学校に入学した頃に』淵澤老刀自は、朝鮮女子教育界に対する功勞によつて、表彰の栄に擔はれた。これを見た趙女史は、幼な心に『女も学問をすれば、天皇陛下から御ほめをいただける』と考へ、この栄へのあこがれの小さな芽生えが、女史をして遂に朝鮮女性最初のしかも唯一人の女学士にまで成長させたのだ<sup>⑪</sup>』と記された。

こうしたコロナル・ミッショナリーとしての日本人女教員の役割は、植民地支配の暴力性より、文明性・近代性の光を輝かせ、朝鮮の子どもらと親たちに、さらには日本人自身に、植民地支配の邪悪さより「善良さ」を宣べ伝えることだったと言えよう。そこで皇民化は遅れた朝鮮人を日本人に作り直す、最良の導きとされたのだ。

以上、本稿では、史料的な限界によって、日本人女教員のコロナル・ミッショナリー意識や役割について、断片的な分析をしたが、その解明のためには次のような問題をさらに検討していかなければならない。例えば、彼女たちが朝鮮に広めようとした文明という「福音」の中身は何だったか（科学的な知識だったか、マナーだったか。自分らの教えによって朝鮮人の内面を「回心」させ、日本人として作り直すため、具体的に何をなすべきと思ったか。朝鮮人教員をどのような存在として見たか（自分たちの助力者として見たか）。在朝西洋宣教師をどのように認識したか（彼らの文明観やミッシヨンスクールの教育をどのように見たか）。国家の暴力による朝鮮人弾圧の問題はいかに考えたか。これらの多くの問題は今後の検討課題になろう。

- ① 併合前後における日本の教育関係者の朝鮮教育論に関しては、佐藤由美「併合」前後の教育のジャーナリズムにおける朝鮮植民地教育論」『アジア教育史研究』アジア教育史学会、第六巻、一九九七年、三〇～四〇頁を参照。
- ② 第一章で取り上げた日本女性たちは、誰が遅れた朝鮮を教えるかに関して、直接的な日本女教員論ではないが、それを補うものとして在朝日本女性の役割論を主張した。
- ③ 社説「韓国の女子教育」『婦女新聞』第二二二号、一九〇四年八月一日、一頁。
- ④ 檜山望月「韓国の教育と女子」『婦女新聞』第二二七号、一九〇五年七月二四日、四頁。
- ⑤ 社説「朝鮮開発と婦人」『婦女新聞』第五三八号、一九一〇年九月九日、一頁。
- ⑥ 彼の女子教育論については、友野清文「近代女子教育と『婦女新聞』」『婦女新聞』を読む会編、前掲書、一四五～一六六頁を参照。
- ⑦ 社説「在韓婦人の任務」『婦女新聞』第三八八号、一九〇七年一月一日、一頁。
- ⑧ 社説「在韓婦人の任務（中）」『婦女新聞』第四八六号、一九〇九年九月三日、一頁。
- ⑨ 佐藤由美、前掲書を参照。
- ⑩ 東京女子高等師範学生有志による朝鮮・満州旅行は、一九一六年度から一九二〇年度まで実施された。奥田環「東京女子高等師範学校の『修学旅行』」『人文科学研究』お茶の水女子大学、第七巻、二〇一一年、四一～四五頁を参照。

- ① 平山藤満「鮮満の旅」『櫻蔭会会報』第五〇号、一九一七年、四七頁。
- ② 重松ムラ「鮮満の旅」『櫻蔭会会報』第五〇号、一九一七年、五三〜五四頁。
- ③ 阿部よしお・三浦千代「満鮮旅行日記」『櫻蔭会会報』第四六号、一九一六年、六七〜六八頁。
- ④ 咲本和子「『皇民化』政策期の在朝日本人——京城女子師範学校を中心に——」『国際関係学研究』津田塾大学紀要委員会、第二五号、一九九八年、七九〜九四頁を参照。
- ⑤ 金森京子、前掲書、五七頁。
- ⑥ 浅井操「朝鮮より」『家庭週報』第六一九号、一九二二年六月二五日、七頁。
- ⑦ 淵澤能忠「朝鮮における女子教育」『婦人新報』第二四〇号、一九一七年、九頁。
- ⑧ 趙慶喜「神と人との僕——教へ子として淵澤先生を憶ふ——」『婦人新報』第一八六二号、一九三六年二月一六日、七頁。
- ⑨ 日本支配下における朝鮮人の心理的変化については、拙著、前掲書、二〇〇五年を参照。
- ⑩ 「朝鮮女性最初の文学士趙慶喜女士」『婦女新聞』第一七〇八号、一九三三年三月五日、九頁。

## おわりに

本稿では、植民地朝鮮に渡った日本人女教員をコロニアル・ミッシヨナリーとして捉え、日本人女教員を朝鮮に送り出す帝国内部の認識や日本人女教員自身の意識を明らかにしようとした。

第一章では、日本女性は朝鮮で自ら何を見て、どのように認識したかを分析し、彼女たちの中で芽生えた朝鮮認識・帝國意識を論じた。朝鮮に渡り、自身の目で見た朝鮮について書き記した日本女性は、政治家・官僚・企業家等の妻として朝鮮に渡った人か、自ら朝鮮で活動した人（学校設立者・教員・ジャーナリスト）・視察に渡った人・旅行者等であった。彼女らは、遅れた朝鮮・野蛮な朝鮮人（頑固で無礼で忘ける者で不潔な朝鮮人、秩序意識も公共意識も国民意識も持ち得ていない遅れた朝鮮人）について書き記しており、その遅れた朝鮮人、とりわけ朝鮮女性を姉意識から教え導く、「帝国の女性」の新しい自己認識を生みだした。従来には、戦前に女性運動家として名を挙げた日本女性たちは、いかに日本の植民地支配を肯定的にとらえ、それに加担したかの問題が主に検証されたが、本稿では、明治末期を中心に、教育のある日本女性に限られるが、彼女らの間に広がった帝國意識を分析し、その認識こそがコロニアル・ミッシヨナリーとしての日本人女教員を



生みだす土壤であり、帝国の力量であると論じた。

第二章では、日本人女教員は朝鮮にどれほどいたかを明らかにした。併合前に官公立の小学校や高等女学校（朝鮮人学校と日本人学校の両方）に百数十人程度の日本人女教員が教えていたが、一九四三年には四五〇〇人以上（私立学校も入れて）に達した。特に、女子中等教育機関において日本人女教員数が朝鮮人女教員数を増しており、朝鮮人女子生徒は日本人女教員の影響をより強く受ける環境下に置かれていた。

第三章では、日本の朝鮮支配の拡大によって遅れた朝鮮・野蛮な朝鮮人を誰が教え導くかの問題が浮上する中で、日本人女教員はどのような存在として考えられ朝鮮に送られたか、そして彼女らの意識と役割は何だったかを分析した。史的な制約はあるが、彼女らは、日本社会の期待において、また自己認識において、コロニアル・ミッシヨナリーに他ならない。彼女らは、近代的学校という場で、朝鮮を後進・野蛮という罪から救いだす文明の「福音」を片手にあらわれ、文明の魅力と人の「善良さ」で朝鮮人の子どもや親たちを惹きつけ、知らず知らずの内に、場合によってはあからさまに、帝国の様々な教えや価値を広めようとしたのだ。

本稿では、帝国におけるコロニアル・ミッシヨナリー論と日本女性の役割論に結びつけ、日本人女教員が遅れた朝鮮人を教え導くコロニアル・ミッシヨナリーとしていかに認識され、送られたかを論じた。他民族・他国家を包摂して展開した日本帝国が備える帝国の担い手論において、日本人女教員はどのような存在として位置づけられていたかを検討しようとした。当時の帝国論または帝国の担い手論について、本稿では主に女性むけの週刊誌・雑誌・同窓会機関紙の資料を用いてコロニアル・ミッシヨナリー論を取り上げたが、今後、帝国におけるコロニアル・ミッシヨナリー論の生成と展開についてはもとより、帝国の形成と共に台頭した帝国の担い手論の全般について、資料と内容の両面から幅広く究明していかなければならない。

Hokkaido continued till 1937.

Missionaries in Colonial Korea:  
The Case of Japanese Female Teachers

by

PARK Sunmi

In this paper, I analyze Japanese female teachers who traveled to colonial Korea as colonial missionaries based on viewpoint that recognizes the imperialist sentiments that motivated the Japanese women who can be regarded as upholding the Japanese empire. In section one, which deals with the period from the early 1900s to just after the annexation of Korea by Japan, I clarify what the Japanese women saw in Korea and how they perceived it. In section two, I examine the numbers of Japanese female teachers there were in Korea at the end of the Joseon era and under the Japanese occupation. Lastly, in section three, I analyze how Japanese female teachers can be considered as upholding the Japanese empire when facing difficult problems, such as who would lead undeveloped Korea and teach the uncivilized people who lived there as well as the consciousness of the teachers and their role in colonial Korea.

The Proximity Principle and the Movement of Waste

by

WATANABE Kohei

The generation of waste is almost inevitable in daily life as well as in commercial activities. Historically, waste was dealt with on site where it had been generated, but with the advent of urbanisation and increased use of materials that are difficult to deal with on site, waste has come to be collected, transported, and treated at dedicated facilities. In most of the